

## 多様性認める教育望む

PTAの代表者や大学教授、臨床心理士、社会福祉士ら25人が出席した10日のいじめ対策連絡協議会では、社会が狭い子どもは自分と違うものを排除しがちだととして、多様性を認められるようになる教育を望む声が複数上がった。保護者間の関係が子どもに影響している場合もあるとして、いじめを学校内の問題と捉えずに社会全体で考える必要性が指摘された。

県公立学校派遣スクールカウンセラーのスーパーバイザーを務める臨床心理士の五十川早苗さんは「一人一人に個性があり、違うことに価値が

### いじめ対策協で意見

あるというダイバーシティ（多様性）教育に力を入れるべきだ」と強調。県子ども会育成連合会長の山崎暢子さんは「幼いころからいろんな体験ができる場面をつくり、子どもの社会を広げることが大事」と求めた。

いじめや不登校の子どもも多く接している福井子どもこのころの発達研究センター教授の松崎秀夫さんは「いじめは保護者の人間関係が子どもに影響しているケースが少なくなく、子どもだけを指導しても解決しない」と報告。県スクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーを務める県社会福祉士会長の竹澤賢樹さんも「大人の立場の強弱が影響するケースもあり、大人の社会を切り離して考えるのはおかしい。社会全体で多様性を認めていかなければならない」と話した。

外国籍の子どもが増えていることも相次いで取り上げられ、東村健治県教育長は「外国籍の子どもがコミュニティーに溶け込めるようにするための言語教育が何より重要だが絶対的に人手が足りない。拡充に向け努力していく」と述べた。（小林）

## 保護者間関係も考慮を